

## 経営システム工学科卒業論文概要集の指定フォーマット

法政 権太郎 (10X0001) 法政 花子 (11X0000) 指導教員 法政 太郎

## 1. はじめに

卒論概要は、このファイル<sup>1</sup>を編集して書く。同梱の「README.txt」、および第2節以降の作成要領を熟読した上で、作成すること。完成例として、「abstract\_thesis\_sample.pdf」を参考とすること。

L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X のコンパイルには、外部ファイルとして、gaiyou2021\_SJIS.sty が必要であり、同じフォルダに入れてコンパイルしなければならない。example\_fig.pdf はサンプル用の画像ファイルである。一通り作成したら印刷、確認し、微調整すること。なお、L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X の書き方の詳細、命令などについては Web サイト（例えば、<http://www002.upp.so-net.ne.jp/latex/> など）や単行本などを参考にすること [1]。

## 2. 卒論概要作成要領

以下に挙げる卒論概要の仕様については、gaiyou2021\_UTF8.sty で設定しており、適切にコンパイルすれば仕様を満たした概要となる。gaiyou2021\_UTF8.sty は、原則として変更しないこと。

## 2.1 用紙とページ数

概要の用紙サイズは、A4 判縦置きとする。1 件の論文について執筆者が 3 名以下の場合、概要は 2 ページで作成する。4 名の場合は 4 ページで作成する。5 名以上は認めない。また、ページ番号はつけないこと。

## 2.2 見出し

見出しは、「2021年度 経営システム工学科 卒業論文概要集」とする。

## 2.3 余白

余白は、上下左右 25mm とする。ただし、上端の余白については、見出し下の線までの距離とする。

## 2.4 体裁

本文は 1 ページ 48 行（見出しを除き、題目・氏名：5 行、本文：43 行とし、2 ページ目は見出しを除き 48 行とする）とし、2 段組（1 ページ目の場合、1 段 20 文字×43 行。2 ページ目以降は 1 段 20 文字×48 行、段間は全角 2 文

字分あける）で構成する。段落での字下げ（インデント）も必要である。インデントは、段落はじめに自動的に付与される。段落は空行を入れることで実現できる。見出しと題目の間、題目と氏名の間、氏名と本文の間を 1 行ずつあける。第2節以降、参考文献まで、節の直前に空行を入れること。

## 2.5 フォント

「1. はじめに」など、各節（大きな論文では章と言ってもよい）の数字とピリオドは半角、その直後に半角の空白を空けて「はじめに」とする。太字（ボールド体）とする（T<sub>E</sub>X には明朝体の太字はない）。

## 3. 卒論概要の体裁に関する一般的な注意

## 3.1 題目

題目は 2 行以内に収める。中央揃えにする。

## 3.2 氏名

氏名、（学生証番号）、指導教員名の順に書く。共同研究の場合は学生証番号順に 1 行に配列する。中央揃えにする。

## 3.3 句読点

句読点は、原則として、全角カンマ「,」、全角ピリオド「.」を使用する。

## 3.4 記号

半角で打つピリオド、カンマ、セミコロン、コロンなどの区切り記号の後ろは、明示的に半角空白を入れる。バランスの良い文字と記号の美しい配列を心がければ、読みやすい論文となる [2]。

## 3.5 数式

文章中に数式を入れるとき、数式環境を使う。 $E = mc^2$  のような、文章に数式が組み込まれているものを「インライン数式」と呼ぶことがある。バランスを見て、数式の前後には半角空白を入れるとよい。数式には半角文字の斜字体を使うが、演算子（例えば  $E[X]$ ,  $\log(Y)$  の  $E[\ ]$  や  $\log(\ )$ ）などは斜字体にしないから、各自でよく調べた上で各指導教員の指導を受けること。一方、独立した数式は「別行立て数式」などと言い、次のように表される。

$$f(x) = a_0 + a_1x + a_2x^2. \quad (1)$$

<sup>1</sup>abstract\_thesis\_2020\_TeX\_Mac.tex

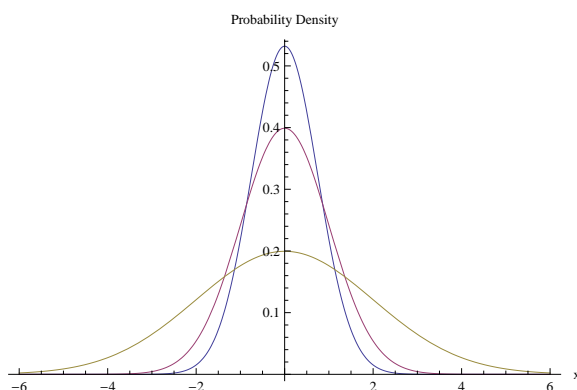


図 1: 正規分布の密度関数

表 1: 表の例.

$f(x)$	$a$	$b$	$c$	$d$
1	10	5.1	2.0	3.4

式 (1) は `align` 環境で書かれており、自動番号付けになる。例えば、上の数式をコピー・貼り付けし、もう一つの「別行立て数式」 $g(y)$  を作成すると以下ようになる。

$$g(y) = \beta_0 + \beta_1 y + \beta_2 y^2. \quad (2)$$

このとき、式 (1) からの連番となる数式番号が自動的に付与される。もし、数式番号を付与しない数式を「別行立て数式」で書く場合は、次のように `align*` 環境とするとよい。

$$h(z) = \gamma_0 + \gamma_1 z + \gamma_2 z^2.$$

複数行の別行立て数式は、同じく `align` 環境によって以下のように実現できる。(例) コストの式は

$$\begin{aligned} C(T) = & C_1 T + C_2 H(T) + C_3 \{H(T + T_w) \\ & - H(T)\} - C_4 \{H(T + T_d) \\ & - H(T + T_w)\} + C_p(T - T_s), \end{aligned} \quad (3)$$

となる。

### 3.6 図表

図、表には通し番号を付ける。図の標題（キャプション）は図の下に中央揃えで、また表の標題は表の上に中央揃えにして配置する（図 1 および表 1 参照）。図は縮小したものを貼り付けることになるが、書かれた文字などが読めないほど小さな字になってしまっては意味がないので、印刷したものをよく見て、調整すること。また、印刷時はモノクロになるため、図において色での判別は行わないこと。

### 3.7 参考文献の引用

文献は、辞書順あるいは引用順に通し番号を付けて、文末にまとめて記載する。通し番号は半角の数字と角括弧で記す（[1] など）。通し番号は本文の関連箇所ですべて `\cite` コマンドを使って引用し、関係性を明示すること。文献のリストは、以下の項目順に記載する。

著者名、論文名あるいは書名、ジャーナル名あるいは出版社名、巻・号、ページ番号、発行西暦年。

文献先が Web ページの場合は、以下の項目順に記載する [3]。

著者名、Web ページの題名、入手先の URL、(入手日付)。

入手先の URL の記述には、`\url` コマンドを用いる。

### 4. その他

指導教員ごとに体裁の基準は少しずつ異なる場合があるから、よく理解して作成すること。

### 5. おわりに

一般に「はじめに」は「おわりに」で受け、「あらまし」は「むすび」で受ける。「序論」に対しては「結論」が対応する。

### 参考文献

- [1] 奥村晴彦・黒木裕介, [改訂第 7 版]  $\text{\LaTeX}$  2<sub>ε</sub> (ラテック・ツー・イー) 美文書作成入門, 技術評論社 (2017).
- [2] 前川清, 卒業論文概要フォーマット集 2, ○○出版社, 東京 (2012).
- [3] 法政大学図書館, レポート・論文を書くには, <http://www.hosei.ac.jp/library/kensaku/support/report/index.html>, (参照 2021 年 12 月 1 日)

注: 参考文献に節番号はつけてはいけない。`thebibliography` を使えばよい。